

平成 22 年度「学力向上のための P D C A サイクルづくり支援事業」

P 調査分析結果について

教 学 指 導 課

1 調査教科及び調査した児童生徒数

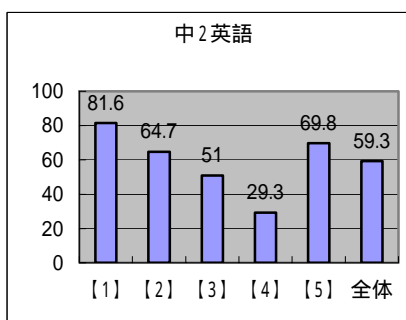
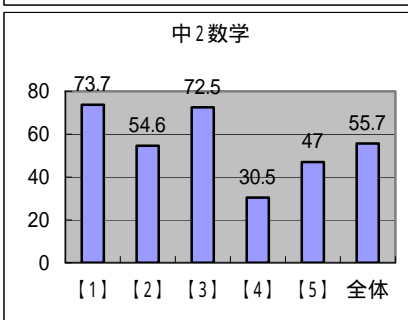
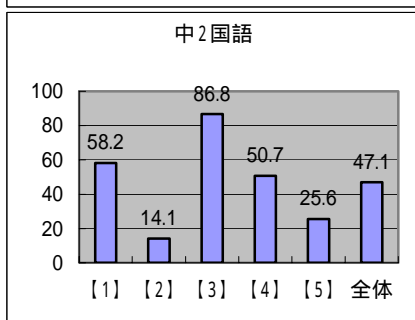
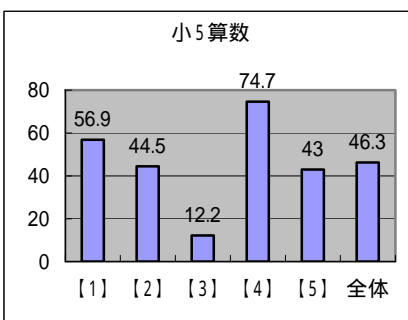
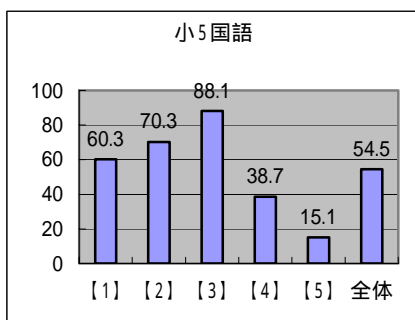
() 内は参加校数

	国語	算数・数学	英語
小学校 5 年	14, 047 人 (273 校)	14, 041 人 (273 校)	
中学校 2 年	11, 245 人 (116 校)	11, 227 人 (116 校)	11, 356 人 (117 校)

2 各問の正答率

(単位 %)

問題番号		【 1 】	【 2 】	【 3 】	【 4 】	【 5 】	全体
小学校 5 年	国語	60.3	70.3	88.1	38.7	15.1	54.5
	算数	56.9	44.5	12.2	74.7	43.0	46.3
中学校 2 年	国語	58.2	14.1	86.8	50.7	25.6	47.1
	数学	73.7	54.6	72.5	30.5	47.0	55.7
	英語	81.6	64.7	51.0	29.3	69.8	59.3



(1) 国語

< 小学校 5 学年 >

- ・ 学年別漢字配当表の 3 学年までに配当されている漢字を書くことに成果。【 1 】
- ・ 文脈に沿って接続語を適切に使うことに成果。【 3 】
- ・ 目的に応じて中心となる語をとらえ、文章を正しく読むことに課題。【 4 】
- ・ 主張をもとに、複数の情報を対応させたり組み合わせたりして、自分の考えにまとめることに課題。【 5 】

< 中学校 2 学年 >

- ・ 語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うことに成果。【 3 】
- ・ 四字熟語の中の漢字の意味を正しく捉えることに課題。【 2 】
- ・ 作者の考えをつかみ、自分の考えを明確にもった上で、本文から必要な叙述を取り出し、理由を明確にして形式にそって記述することに課題。【 5 】

(2) 算数・数学

<小学校5学年>

- ・考え方を図や式に表現したり、図や式から考え方を読み取ったりすることが向上。【5】
- ・「小数+整数」の計算に課題。【1】
- ・筆算の計算段階の意味を具体的な場面と結びつけることに課題。【3】

<中学校2学年>

- ・加減乗除を含む計算に成果。【1】
- ・文字式の意味を、具体的な事象の中で読み取ることが向上。【5】
- ・回転体の体積を求めることに課題。【4】

(3) 英語

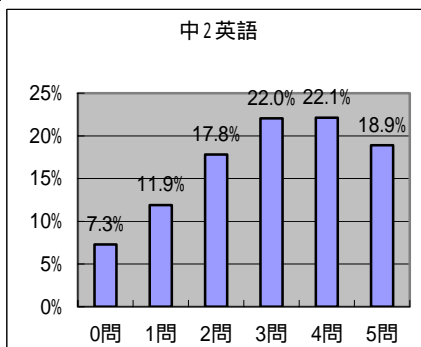
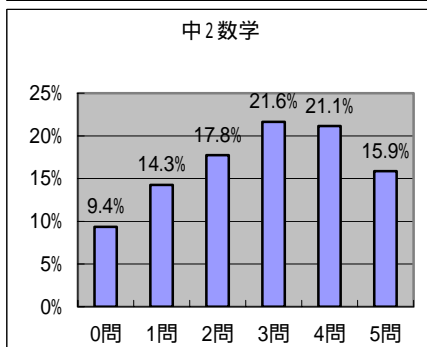
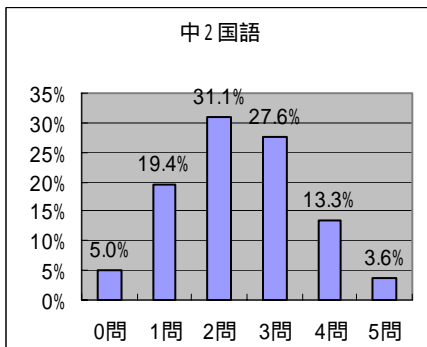
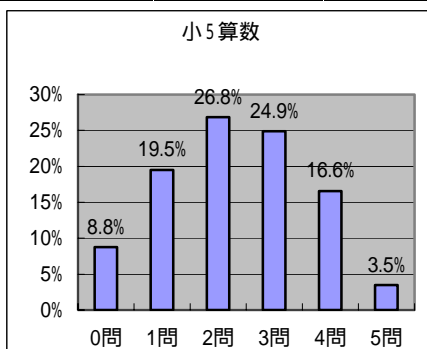
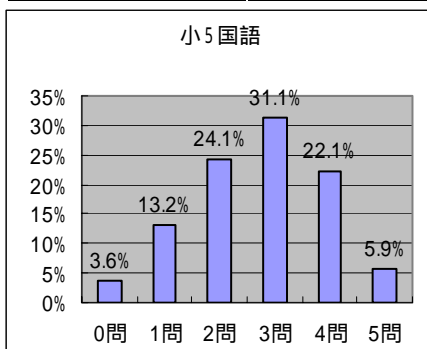
<中学校2学年>

- ・3人称・単数・現在形の理解に成果。【1】
- ・身近な場面、自分自身について、紹介文を書くことに成果。【5】
- ・英文で書かれた本文の内容について、疑問詞を使った簡単な質問を理解し、適切に答えることに課題。【4】

3 正答数の分布

(単位%)

正解数		0問	1問正解	2問正解	3問正解	4問正解	全問正解
小学校 5年	国語	3.6	13.2	24.1	31.1	22.1	5.9
	算数	8.8	19.5	26.8	24.9	16.6	3.5
中学校 2年	国語	5.0	19.4	31.1	27.6	13.3	3.6
	数学	9.4	14.3	17.8	21.6	21.1	15.9
	英語	7.3	11.9	17.8	22.0	22.1	18.9



- (1) 全体的な傾向として、2～3問正答を平均とする、ほぼ左右対称の分布になっている。中学校数学と英語では、やや右よりの分布となっている。
- (2) 正答数が0～1問の児童・生徒の割合が、各教科20%前後であり、昨年度と比べると、英語がやや減ったものの、ほぼ同様の割合であった。また、4～5問正答した児童・生徒の割合は、20～40%であり、昨年度とほぼ同じ割合であった。学習から離れがちな児童・生徒を引き寄せ、伸びる力を一層伸ばすための指導を考えていく必要がある。
- (3) 各教科とも、学習指導を進めるに当たっては、生徒一人一人の特性を十分理解し、それぞれの生徒に応じた指導方法を工夫していくことが必要である。特に、定着状況が不十分な児童・生徒に対しては、繰り返し学習をしたり、場面を変えて学習したりするなどの補充的な学習が必要になる。また、基礎・基本を身に付けている児童・生徒に対しては、それを基にしてより広げたり深めたり、進めたりするなどの発展的な学習に取り組めるようにする指導の工夫が求められる。

各教科の正答率及び正答数に対する分析

(過去の正答率や指導の具体については、解説・指導シートを参照)

【国語】<小学校5年>

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

- ・【一】から【三】までの正答率は、昨年度の正答率と比較して上回っている。しかし【四】と【五】の正答率が下回り、課題となった。

(2) 学習指導にあたって

- ・【一】の正答率は、60.3%である。実際の生活で使われる機会が少ない漢字についての指導を充実させるとともに、既習の漢字が新しい読み方として扱われる際の指導も大切にしたい。
- ・【二】の正答率は、70.3%である。誤答としては、送り仮名の間違が多いことが予想される。日常の授業の中での継続的・反復的な指導を今後も意識していきたい。
- ・【三】の正答率は、88.1%である。昨年度の類題の正答率より12.2ポイント上回っている。文と文のつながりを考えながら接続語を使うことは、ほぼ理解されている。接続語や指示語、文末表現などに注意して読む学習を積み重ねてきている成果と言える。今後も大切にしていきたい。
- ・【四】の正答率は、38.7%である。昨年度の類題よりも28.0ポイント低くなっている。選択式の解答であった昨年度の問い方とは違うため単純比較はできないが、文章の中で比較する観点を明確にして、叙述同士を関係付けて読み取ることに課題が見られる。中心となる語や対比される語に注目して正しく読み取る指導を大切にしていきたい。
- ・【五】の正答率は、15.1%である。昨年度の類題の正答率より22.2ポイント低くなっている。目的や状況に応じて必要な情報を取り出し、取り出した情報を関係付けて考えたり、述べたりすることに課題がある。相手意識・目的意識をもち、状況に合わせた言語活動を通して、自分の考えを根拠づけて話したり、書いたりする学習を工夫していきたい。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

- ・ほぼ正規分布に近い。正答数0問の児童は3.6%で、昨年度より2.4ポイント下回っている。全問正答の児童は5.9%で、昨年度より9.6ポイント下回っている。

(2) 学習指導に当たって

- ・日常の授業を進めるに当たっては、つける力を明確にして言語活動を決め出すようにすることが求められる。その際に、児童の興味関心を把握した上で、必要感があり追究の見通しがもてる学習課題を設定していくようにする。
- ・補充的な学習では、継続的・反復的な指導をするように考える。特に漢字に関する指導においては、実際に文の中で使われているものを、機会をとらえて指導していくようにする。また、日々の漢字練習の仕方やテストのやり方なども、児童が意欲をもてるものとなるように工夫する。
- ・発展的な学習では、目的に応じて複数の情報を対応させたり組み合わせたりして、自分の考えをまとめ、交流する学習を構想する。そのために、追究場面では、ただ話し合いの場面を設けるのではなく、追究の目的と追究の見通しを明確にし、言葉の意味や働きを考え合う学習や、根拠を示し、理由を付けて、お互いの考えを伝え合う学習を行うようにする。

【国語】＜中学校2年＞

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

【一】【三】【五】については、過去の類題の正答率より高い正答率であった。【二】【四】については、過去の正答率より下回り、課題が残った。

(2) 学習指導に当たって

- ・【一】の正答率は、58.2%である。抽象的な語彙、日常の話し言葉の中で使われることの少ない語彙について課題がある。生徒が語彙を増やしていけるように、生活の中で繰り返し使用していくなど、機会を捉えて引き続き指導をしていきたい。
- ・【二】の正答率は、14.1%である。「思考」と誤答したことが予想され、四字熟語の意味の理解をしたり、漢字の意味を正しく捉えたりする力に課題があると考えられる。漢字の成り立ちや意味を丁寧に指導していく必要がある。
- ・【三】の正答率は、86.8%である。昨年度の正答率より25.5ポイント上回っている。辞典に掲載されている複数の意味の中から、文脈に照らして、その言葉の意味を適切にとらえさせる指導の成果が上がっていると考えられる。今後も継続していきたい。
- ・【四】の正答率は50.7%である。古典特有の仮名遣いの特徴や語のまとまりの理解が十分でないことが予想される。音読を通して、歴史的仮名遣いに親しみ、慣れる指導が必要である。
- ・【五】の正答率は25.6%である。昨年度の正答率より6.2ポイント上回っている。誤答の類型により指導の重点を考えたい。類型2、3の場合は、場面や状況に応じて情報を関係付けて書くことに課題がある。また、類型4の場合は、目的に応じて必要な材料を集めることや、集めたものを整理する力に課題がある。類型5の場合は、自分の考えを根拠付けて分かりやすく書く力に課題がある。筆者の主張の読み取りや、示されている複数の情報の関連付け、根拠をあげながら理由を書く指導、筆者の論理の展開の仕方に目を向けさせる指導、根拠や理由を明確にしていく指導が求められる。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

正答数0問が5.0%である。昨年度より3.6ポイント下回っているが、やや左側に寄った山の形は昨年度と変わらない。また、全問正答の生徒は3.6%であり、昨年度より3.4ポイント下回っている。伸びる力を一層伸ばす指導が必要である。

(2) 学習指導に当たって

- ・日常の授業を進めるに当たっては、つける力を明確にして言語活動を決め出すようにすることが求められる。その際に、生徒の興味・関心を把握した上で、必要感があり追究の見通しがもてる学習課題を設定していくようにする。
- ・補足的な学習では、定着しにくい原因を押さえ、生徒が文脈に沿って適切かどうか考えながら漢字を使っていく学習場面を設定していくことが大切になる。また、抽象的な語彙、日常の話し言葉の中で使われることの少ない語彙を類義語として他の言葉と関連付けたり、使ったりする場を設定する。また、四字熟語などは教室に掲示する場所を作るなど、生徒が日常的に触れる学習環境作りをする必要がある。
- ・発展的な学習では、「提示と説明」、「問いかけと答え」、「中心の部分と付加的な部分」、「事実と意見」、「主張と根拠」など、文章の論理の展開の仕方や構成の仕方を考える学習場面を設定する。また、そういった論理の展開や構成がどのような表現の効果を生んでいるのかを考える学習場面も併せて設定する。その学習場面での話し合いは、どう考えたかを根拠にした提案や考え方の違いを指摘する意見交換を意識する。

小・中学校の課題と共通な点として次のことが考えられる。

目的に応じて必要な情報（グラフ、図、メモ、文章等）を取り出し、場面や状況に応じて、取り出した情報を関係付けたり、組み合わせたり（根拠・理由・主張、具体例・考察、事実・意見等）して考えていくことが苦手である。

目的・場面や状況を明確にした言語活動の中で複数の考えを比較検討、交流するような学習が十分でない。

【算数】 < 小学校 5 年 >

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

- ・【 5 】 以外の問題は、過去の類題の正答率よりもやや低く課題が残った。【 5 】 は、正答率が 5 割に満たないものの、昨年度の類題の正答率を上回った。

(2) 学習指導に当たって

- ・【 1 】 は平成 21 年度 P 調査 65.6% であった正答率が低下し、本年度は 56.9% になった。小数の加法・減法の指導では、小数の意味や仕組みを数直線を使ったり、単位を付けて日常生活に結び付けたり、整数の計算に帰着させるなどして理解させることに留意したい。また、計算の結果を見積もって計算し、答えと見積もりを照らし合わせて検討する習慣を付けることも大切である。
- ・【 2 】 は平成 21 年度 P 調査 44.7%、本年度は 44.5% となった。これは、1 より大きい分数を仮分数として同じ単位分数のいくつ分と表したり、帯分数として整数部分に着目して数直線上に表したりすることの理解が十分でないと考えられる。さらに、分数、小数、整数を 1 本の数直線上に表し、相互の関係を考える学習を積み重ねる必要がある。
- ・【 3 】 は正答率が 12.2% と低かった。これは、問題文の意味をとらえにくかったことや、筆算の各段階の意味を具体的な場面と結び付けることが難しかったことが要因として考えられる。計算手続きの意味を具体的な場面と結び付け、例えば 100 の束をいくつずつ配れそうか考えるなどの活動を取り入れながら指導することが大切である。
- ・【 4 】 は平成 21 年度 P 調査 78.5%、本年度は 74.7% であった。これは、表の縦、横の項目の組み合わせから各欄の数値を読み取ることが概ねできていると考えられる。目的に応じて資料を集めて表に整理し、特徴や傾向をとらえたり、整理した表を縦や横に見て数値の意味をとらえたりする指導を今後も続けていきたい。
- ・【 5 】 は平成 21 年度 P 調査 34.6%、本年度は 43.0% であった。これは、図や式を読む学習や、考え方を説明するような学習が地道に行われている成果と考えられる。さらに、考え方を図や式に表現したり、表現された図や式から考え方を読み取ったりする双方向の学習を位置付けるとともに、説明する活動の充実を図りたい。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

- ・ 2 ~ 3 問正答を平均とする、ほぼ正規分布に近い分布になっている。正答数 0 問の児童の割合が 8.8% と平成 21 年度 P 調査 6.6% よりも上昇した。全問正答した児童の割合が 3.5% であり、平成 21 年度 P 調査 8.2% よりも下降した。

(2) 学習指導に当たって

- ・ 日常の授業を進めるに当たっては、個に応じたきめ細やかな指導を行うことが大切である。特に、定着状況が不十分な児童に対しては、繰り返し学習をしたり、場面を変えて学習したりするなどの補足的な学習が必要になる。また、基礎・基本を身に付けている児童に対しては、発展的な学習に取り組めるようにする指導の工夫が求められる。
- ・ 補足的な学習では、例えば、複数の考えで計算の仕方を説明することができる「 4×1.5 」のような計算で、1 つの考えについて、それを別の数値の計算で用いてみたり、同じ数値の計算を別の考えで調べたり説明したりするというような学習が考えられる。
- ・ 発展的な学習では、例えば、「 20×1.5 」のような小数第 1 位までの計算の仕方を基に、小数第 2 位がある「 20×1.35 」のようなかけ算の仕方を考え説明するような学習が考えられる。

【数学】<中学校2年>

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

- ・基本問題の【1】、【3】は、昨年同様正答率が7割を超えている。【2】は昨年度からやや正答率が低下した。【4】の正答率は昨年度よりも若干上がったものの、3割程度であり課題が残った。活用問題である【5】の正答率は5割に満たないが、昨年度と比較して向上している。

(2) 学習指導に当たって

- ・【1】は昨年度72.9%、本年度73.7%であり、安定した力がついてきている。これは、誤りのある計算について、誤答になる理由を考え、正しい計算方法との違いについて検討する場面を仕組むなど、指導の工夫が行われてきた成果だと考えられる。今後も、項を意識しながら計算の順序を確かめて正しい計算ができるように指導したい。
- ・【2】の正答率は平成16、17年度と50%前後であったものが、平成20、21年度は60.1%、58.9%と改善したが、本年度は54.6%であった。関数領域では、 $y = -2x$ の-2が、表やグラフにどのように現れているか考えるなど、表、式、グラフを関連付けながら関数の特徴を見いだしていく数学的活動を位置付けていきたい。
- ・【3】は昨年度が73.4%、本年度は72.5%であった。これは、紙を折ったり図形を動かしたりする操作を通して線対称や点対称の意味を理解する数学的活動や、線対称な図形と点対称な図形を比較して、共通点や相違点を見いだしていく学習などを丁寧に行ってきた成果であると考えられる。
- ・【4】の正答率は平成21年度P調査、C調査では、22.2%、25.2%であり、今回の調査では30.5%であった。立体の構成や計量について、具体物を示したり実際に作ったりしながら実感的に学ぶ授業の工夫が伺える。さらに確実な習熟を図るために、覚えた公式に数値をあてはめて体積を求めるだけでなく、計算の過程や求めた数値を立体と関連づけてとらえるなどの工夫が必要である。
- ・【5】の昨年度の正答率は26.3%であったが本年度は47.0%に向上した。事象を式に表すだけでなく、「式の意味を具体的な事象の中でよみ取ること」や「それを説明すること」を一層充実させる授業をさらに推進したい。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

- ・昨年度は平均値が2～3問にある正規分布に近かったが、本年度は平均値が3～4の山なりであり、昨年度と比べて、より多くの問題を正答した生徒の割合が増え、全問正答した児童の割合も増加した。一方、正答数0問の児童の割合も増加した。

(2) 学習指導に当たって

- ・定着状況が不十分な生徒に対しては、繰り返し学習をしたり場面を変えて学習したりするなどの補充的な学習が必要である。また、基礎・基本を身に付けている生徒に対しては、それをより広げたり深めたり進めたりするなどの発展的な学習に取り組めるようにする指導の工夫が求められる。こうしたことを踏まえ、生徒一人一人の特性を十分理解し、個々の生徒に応じた指導方法を授業の中で実現していくことが必要である。

補充的な学習では、例えば、数式領域では $\frac{2x+1}{3} - \frac{x+2}{3} = \frac{x+3}{3}$ と計算してしまうのはどの

ような手続きをしたときか検討し、その手続きの妥当性を語り合った後に、留意することを意識してドリル学習をすることなどが考えられる。

発展的な学習では、例えば、【5】の問題で、碁石の並べ方を変えて、そのときの碁石の数を式に表し互いの式を読み合う学習も考えられる。

【英語】 < 中学校 2 年 >

1 各問の正答率について

(1) 全体の傾向

- ・ 基礎的・基本的な知識・理解をみる【 1 】の語形変化と【 2 】の並べ替えの問題は正答率が高い。【 3 】【 4 】の本文の内容理解をみる Q - A は、昨年同様正答率がやや低い。【 5 】の条件英作文については、昨年度の正答率よりも大幅に高くなった。

(2) 学習指導にあたって

- ・ 【 1 】 正答率は 81.6% と高い。like や play など基本的な語彙が普段の授業で使われていたり、《主語と一般動詞の関係》の理解を図ったりする指導が丁寧に行われている成果である。今後、十分な口頭練習と [主語 + 動詞] に着目させた書く活動を継続したい。
- ・ 【 2 】 正答率は 64.7% である。昨年度の 69.6% より約 5% 低下したが、can の用法の定着のために日常の授業の中で口頭練習が繰り返し行われていると考えられる。今後、英語と日本語との《語順》の違いを意識させる指導を継続したい。
- ・ 【 3 】 正答率は 51.0% であり、昨年度の 55.7% より約 5% 低下した。《Yes-No 疑問文》について丁寧に指導しているが、Yes、it is. などと主語を間違えている生徒が依然多いことが予想される。教科書教材の本文の内容についての《Yes-No 疑問文》を扱う中で、主語を正確に見付けさせる指導を継続して行いたい。
- ・ 【 4 】 正答率は 29.3% と低い。昨年度の 25.8% や一昨年度の類題 17.6% より上昇傾向にある。誤答は、He play tennis. や It is tennis. などが多いと予想される。疑問文の意味や本文のどの部分についての質問なのかが分かっていても、答え方の理解と定着が不十分であることが原因である。今後は、《wh-疑問文》について、[主語 + 動詞] の語順で正しく答えることを意識させながら、書くことで文法面での正しさを確認できるような指導を丁寧に行いたい。
- ・ 【 5 】 正答率は 69.8% であり、昨年度の 27.6% や一昨年度の類題 33.8% と比べても大変高くなった。「一人称で簡単な条件を入れて書く」という指導が、日常の授業で繰り返し行われている成果であると考えられる。今後は、「3 人称でより自由度の高い条件を与えて書く」という指導を更に進めていきたい。

2 正答数の分布について

(1) 全体の傾向

- ・ やや右よりのほぼ正規分布である。正答数が 0 問や 1 問の生徒は、27.0% から 19.2% に減少した。

(2) 学習指導にあたって

- ・ P 調査や校内の定期テスト等の結果から、主に遅れがちな生徒の誤答を分析し、その生徒に合った支援を工夫したい。さらに、遅れがちな生徒への見とどけに一層配慮し、できたことを褒めたり励ましたりする声かけをして、「できた、分かった」という満足感をもたせるようにしたい。
- ・ 伸びる生徒を伸ばす工夫として、例えば、本文についての英問英答で、さらに 2 ~ 3 問の wh-疑問文を用意しておくなど、次の活動を用意しておくことが考えられる。
- ・ 英語学習へのハードルを低くする工夫として、例えば、授業のはじめの 3 分程度でできる Writing の小テストに向けて、前時に出題予告をし、目標をもって家庭学習を行わせるなどの工夫が考えられる。

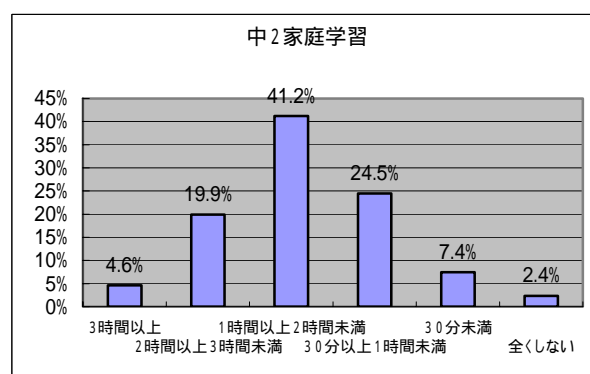
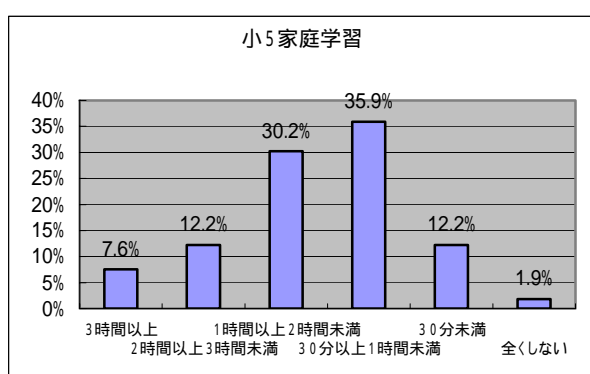
4 家庭学習の時間

学校の授業時間以外に、ふだん（月曜日から金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含まれます。）

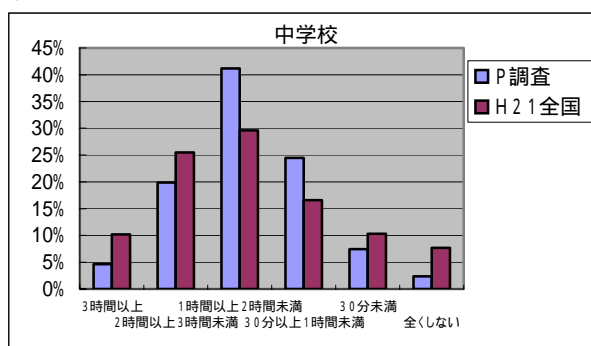
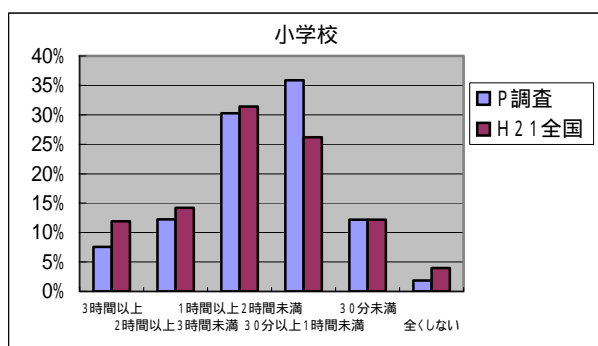
- | | |
|------------------|------------------|
| 1 3時間以上 | 2 2時間以上、3時間より少ない |
| 3 1時間以上、2時間より少ない | 4 30分以上、1時間より少ない |
| 5 30分より少ない | 6 まったくしない |

（単位％）

選択肢	3時間以上	2時間～3時間	1時間～2時間	30分～1時間	30未満	全くしない
小学校5年	7.6	12.2	30.2	35.9	12.2	1.9
中学校2年	4.6	19.9	41.2	24.5	7.4	2.4



- 家庭学習時間が1時間未満である児童・生徒の割合が、小学校5年で50%、中学校2年で30%を越えている。これは昨年度とほぼ同じ状況である。
- 小学校5年では、6～7割の児童が平均30分～2時間家庭学習を行っている。中学校2年では、約6割の生徒が1～2時間家庭学習を行っている。



- 小学校5年では、昨年度の全国学力・学習状況調査における小学校6年の全国平均のデータと比較すると、家庭学習を「全くしない」の割合が、全国の平均と比べて低い。また、30分以上1時間未満の児童の割合が高く、1時間以上の割合は低い。1時間以上の区分に入る児童が増えるように、各学校における実態に即した改善策を考えたい。
- 中学校2年では、昨年度の全国学力・学習状況調査における中学校3年の全国平均データと比較すると、家庭学習時間が30分未満である生徒の割合が全国の平均と比べて少ない。また、1時間以上2時間未満の生徒の割合が高く、中学3年に向けて、さらに2時間以上になっていくよう、各学校の実態に即した改善策を考えたい。